

I 学校運営

教育理念・目的・目標	
教育理念等を踏まえ、広島市立看護専門学校としての目的及び目標を明確に設定し、養成する人材像を明確にしているか	
広島市立看護専門学校の設置目的は「看護師を養成し、もって医療の普及、及び向上に寄与する」ことを目的として条例及び学則第1条に定め明文化している。 本校の育成人材は、目指すべき人材像とともにディプロマポリシー（専門士授与方針）として表記し、教育理念・教育目標とともに明文化して周知に努めている。その実現に向けたカリキュラムポリシー（教育方針）に基づいて教育課程を編成し、教育活動に取り組んでいる。	
①学校の教育理念や目的・目標が、教員や学生、保護者に周知されているか ②学校の教育理念や目標は、教員や学生の指針となっているか	
教育理念・教育目標は、アドミッションポリシー、カリキュラムポリシー（教育課程の編成方針）、ディプロマポリシー（卒業認定）と連動しながら教育内容に反映している。 教員は、授業の中に教育理念が貫かれているかを常に意識しながら授業にあたっている。 学生に対しては、本校の育てたい看護師像としてディプロマポリシー（専門士授与方針）として表記している。教育理念、目標は、学生便覧に示し、学生に説明している。学校パンフレット、ホームページ等に明示しており、進路ガイダンスや入学説明会等、入学生や保護者に対しても説明を行っているが、学生に対しては、日常の様々な場面で伝えるよう意識している。	
③ 目標に対する評価を実施し、その結果を共有するとともに、次回への取り組みに繋げているか	
学校取り組み目標として、地域社会へ貢献できる看護師の養成をめざし「看護師国家試験合格率 100%」と「広島市内への就職率 70%台以上の維持」「看護の魅力を伝える」を目標とし、取り組んだ。運営方針と取り組むべき課題を受けて、課題達成について教員研修で、達成状況を明らかにするとともに翌年度の運営方針について全教職員へ周知を行い、課題から目標設定につなげている。	
学校運営に関するマネジメント	
① 学校全体の情報共有、総務課と教務課の連携は適切に行なわれているか	
運営委員会は、学校の決議機関として重要な位置づけとなっている。学校運営全般に関することは、情報共有も含め、総務課・教務課が連携し、運営委員会を決定機関としている。また、学生の進級、卒業認定に関することその他 行事や学生の生活全般に関することも情報共有を行っている。今年度は、学校教育におけるICT、看護教員の確保、人事交流、学生の確保等について協議を行った。 総務課と情報共有しながら、連携を密に行っている。	
② 業務マニュアルが適切に整備され、必要に応じて適宜見直し、周知されているか	
インシデント発生時には状況を検証したうえでリスク管理を行い、必要に応じて手順の修正・追加を行っている。インシデント発生時よりも手順を簡素化できるように改善し、誰もができるように表示することで、再発防止と業務の質の向上を図っている。	
③ 副校長・教務主任・主任看護教員を中心に職場のメンバー全員が各々チーム力を発揮して問題解決にあたっているか	
本校の組織体制は、校長、副校長、総務課、教務課で構成されている。教務課は、第一看護学科と第二看護学科にそれぞれ係長が配置され、学年ごとに主任も配置されている。 教員各々が持つ強みを活かしながらそれぞれの場でリーダーシップを発揮できるよう人材育成に取り組んでいる。	
④学校評価を組織的に実施し、評価結果を教職員に周知するとともに、外部にも公表しているか。	

また、その結果に基づき改善を図っているか 学校の概要や自己点検、自己評価、学校関係者評価の結果をホームページに公開している。外部組織の理解促進と連携協力体制を確保し、学校運営の改善を図ることを目的に公表している。また、設置主体である広島市にも報告を行っている。 令和6年度からは、対面での学校評価委員会で多くの意見をもとに持続可能な学校運営の改善に向けて取り組んでいる。 学内組織では、3月の教員研修で学校評価の状況と課題について副校長が教職員へ説明を行った。 学校評価からの課題は、全教員で次年度に向けて改善につないでいけるよう計画・実施している。
⑤ 学生情報を適正に管理するための学生支援システムが円滑に運営されているか 学生支援システムにより、学生の基本情報や成績・単位修得の管理を実施している。 学生にかかわる情報は、全てこのシステムに入力し、教職員全体で共有している。学生に関する情報管理は、各学年担当者によって行っている。 学生情報のバックアップ等、マニュアルに沿って、定期的に実施している。

II 教育活動

教育課程
① 教育課程は看護学の内容、求める学修の到達及び学生の成長について明確な考え方と根拠をもって編成しているか 本校の教育理念・教育目的から策定した入学から卒業までの教育について、3つのポリシーに基づき、各看護学の教育目標・教育内容を計画し、実施している。学生の到達度については、各学年において、科目試験による評価や臨地実習評価を行い、個々の学生の学修状況を確認している。科目評価や実習評価終了時には、学生の達成状況を振り返り、課題を明確にしてカリキュラムの編成につなげている。
③ 学習内容は教育理念・教育目標と一貫性があり、時代の要請に応える内容となっているか ディプロマポリシーをもとにカリキュラムにおける科目立てを行い、各科目の授業概要、授業の目的、到達目標を明確にし、その内容をシラバスに掲載している。授業開始時には、シラバスを活用し学生に説明を行っている。改正カリキュラムよりICTの推進が求められている中、令和7年度入学生より電子教科書を導入し、授業資料も電子化をすすめ、ペーパーレスとした。学生はipadを活用した授業を展開しているが、戸惑いなく学習を進めている。今後は順次全学年に移行する予定である。
③ 単位認定の基準及び方法は、看護師に必要な学修を認めるものとして十分に根拠があり、また妥当であるか 単位認定の基準及び認定方法は規定に基づき、各教員が適切に評価を行っている。また、評価結果は運営会議を経て、最終的に校長の承認を得ている。学生便覧の成績評価要綱に則り、年1回3月に卒業認定会議及び単位認定会議を行い、審議して決定している。
④ 未履修科目の原因分析を教員側と学生側で実施し、対応策を講じているか 各学年の担任及び主任看護教員が学生と面談を行っている。未履修科目のある学生の要因は様々であり、面談の中で学習状況だけでなく、生活状況や看護師を目指す気持ち等を確認しながら今後について話をしている。個別状況に対応しながら対応策を学生と教員、状況に応じては保護者も含めて検討している。

近年は、学生の学習に対する意欲や取り組み姿勢等が多様であり、期待する成果を達成するためには、学生に応じた教授方法も併せた検討が必要である。 看護師になるための専門的な学修をするうえで、基礎的な知識をもち、理解力・思考力・判断力を養い、社会性を身につけることができるようなカリキュラムの編成及び看護教員の教育的能力の向上が求められる。
シラバス(授業計画)
① シラバスと教育課程に整合性があり、学生が授業内容を理解できるようにしているか 各領域で授業・実習評価を行い、次年度の課題を明確にし、内容の見直しを行い、学生にとって理解しやすい講義・実習を目指している。シラバスもそれに合わせて毎年内容を修正している。
② スムーズな授業運営を図るため、適切に時間割を調整しているか 前年度の課題も踏まえ、学習効果を考慮した学習進捗をもとにカリキュラムを作成している。月間授業予定表を前月初旬には学生に提示できるようにし、学生の学習環境を計画的に整えられるようにしている。提示するまでに学生の学習時間が確保できる時間割になるよう調整している。 学生に提示後の変更は可能な限り行わないようにしている。特に試験日は年間計画から動かさないようにし、学生が主体的な学習を計画的に行えるようにしている。令和 8 年度からの実習日程の変更に伴い、それに合わせて学内の時間割を組んでいる。実習期間を挟みながらの日程になるため長期化しやすいことが課題である。
④ 学生の状況に応じて授業内容や指導方法を考え、工夫・改善しているか 令和 7 年度入学生から、電子教科書を導入しているが、学生の戸惑いは少なく活用できている。資料においてもペーパーレス化を図り、ipad 内で学生がダウンロードしたものを活用できている。次年度からも順次電子教科書を導入していく予定である。電子教科書導入に伴い、全領域の一貫した国家試験出題基準に沿った内容での教授が行いやすくなったと考える。但し、今年度は校内における Wi-Fi 環境が不十分であったが、次年度より学生のための Wi-Fi 環境をフロアごとに順次整えていく予定である。
⑤ 学生による授業評価を実施し、授業の改善に努めているか 授業及び実習が終了した科目ごとにアンケートを実施し、領域ごとの評価分析したものを教員間で共有し、令和8年度の教育計画に反映させている。令和8年度より外部講師のうち看護部から授業アンケートを実施する予定である。結果を講師に返すことで翌年度の授業改善につなげていただけることを期待している。
実習
① 実習目標が達成されるよう実習環境が整っているか 各部署の実習担当者が実習施設の所属長や指導者と連携し、実習目標達成に向けた実習内容や方法について相談できる関係性をつくるようにしている。各病棟の臨床指導者に病棟の特徴に合わせた実習ができるよう実習指導案を踏まえて、お互いの役割を明確にし、学生の思考や看護の実践に対する指導を行うように、個々のミーティングや指導者会議を活用し、進めている。 特に令和7年度は、テーマに沿ったグループディスカッションを取り入れた会議を実施した。初めて臨床指導者として会議に参加される方もいるため、臨床指導者の意見や思いを十分に表出していただきより連携を強化していく。
② 実習指導者と教員の役割を明確にし、互いに協力して実習指導にあたる体制があるか 実習担当者から各病棟の臨床指導者に実習指導案に沿って、臨床指導者や看護教員がともに、役割分担を確認しながら実施している。又、指導者のみでなく、安吾管理者との連携も必要である。機構4病院での実習指導者会議では、会議の在り方を見直し、学生の状況を指導者たちと共有し課題を中心に話し合う会議スタ

イルとした。また、最終の会議では、実習で学んだ学生の成果を指導者たちにも共有することで、指導のモチベーションとした。

臨床と基礎教育がともに連携し、双方の発展の為のユニフィケーションに繋がっていくことを期待する。

③ 実習時の患者への倫理的配慮を励行しているか

実習が開始する直前実習ゼミでは、接遇・環境・心理・プライバシー等倫理的配慮に繋がる指導を行い実習に臨んだ。受持ち誓約書の説明や署名により形式的な倫理配慮は確立されているが、学生がその意味をどこまで理解し、行動に反映できているかの評価が課題である。倫理的配慮を「守るべき手順」に留めず、患者さんの反応や言動を振り返る場を設けるなど、学生自身が倫理的判断を考える機会の充実が求められる。

④ 実習時の IA・アクシデントを分析し、学生指導に活かしているか

インシデント・アクシデント発生時には、教員・学生双方の視点から原因の分析を行い再発防止に向けた取り組みを具体的に示し実行するように努めている。また、その事案を学生自身の学びの機会とできるよう関わっている。さらに、事案によっては学年全体でカンファレンスの実施、学びの共有を行っている。

Ⅲ 学生支援

学生支援

① 学生が学修を継続できる支援体制を多角的に、かつ学生が利用しやすいように整え、実際に学生生活の支援になっているか

学生が安心して学生生活を送り、学修を継続できるよう、学修面・進路面・生活面を意識した支援を行っている。学生生活を送る上で、本校でどのような学生支援があるかなどを、わかりやすく示した学生ガイドを作成し、学生自ら学生支援内容を理解し、必要時利用できるよう周知している。

進路支援として、1年生・2年生を対象に、進路ガイダンスを各学年で実施している。内容については、進路情報以外に自己理解、社会人として必要な力について中心に学ぶ機会とした。実施後のアンケートでは学生からの評価も高く、進路意識を高める支援につながったと考えている。一方で、入学後早い段階から看護師になる意欲がもてない学生や、学習意欲が低下してしまう学生がいることも課題として把握している。

そこで今年度より、「専門職業人としての社会人基礎力」を目的に、社会人基礎力の育成を重視した取り組みを開始した。具体的には、社会人基礎力チェックリストを活用し、自分自身を振り返る機会を設けるとともに、学年ごとに面接を行い、学生が自分の成長や課題を意識できるよう支援している。学習および生活面の支援については、学生との関わりをより丁寧に行うことで、困りごとを早めに把握できる体制としている。特に、成績不良の学生には個別面接を行い、状況を確認しながら、学習意欲が持てるよう支援している。

② 学生の心身両面での健康管理体制が整っているか

学校保健安全法に基づき、健康診断を実施しており、受診が必要な学生に関しては、学校医の指導の下、受診を勧めている。健康管理に関しては、体調不良時は、早期受診を促し、実習施設等への感染防止に努めている。保健室に来室した学生の状況、講義・実習での気になる学生の状況に関しては、常時担任教員と情報共有しており、学生への対応を検討し、心身両面でサポートしている。

心理的要因により、学業の継続が困難な状況にある学生に対しては、学年担当教員が常に相談を受けるような体制を作っており、必要に応じてスクールカウンセラーに紹介するなどして、カウンセラーの助言も得ながら、サポート体制をとることができている。

③ 学生生活、進学、就職に関して学生の相談に十分に応じているか

1年次より進学、就職に向けてガイダンスを行い、早期に自主的な活動ができるよう、学年ごとに段階的に支援を行う。具体的なイメージをもち、自己の将来を考えられるよう市内のインターシップや実習病院等でのアルバイトの情報提供を実施し、就職や進学に向けて取り組めるようにかかわっている。また、学年での定期面談では、進路についての相談を個別に聞き、情報提供を実施している。

今年度の第一看護学科、第二看護学科就職希望者は100%目標達成できている。

学年単位では適宜面談を実施して、必要時スクールカウンセリングへつなぎ、共有事案については教務会議や学年間のミーティングを活用し共有を行っている。

④ 学生主体で自治会活動が実施できるよう計画的かつ適切な指導・支援を行っているか

学生自治会は学生の自治を守り、友情と団結及び学生生活の発展向上を図ることを目的としており、2年生の学生を中心として運営を行っている。毎年3月に行われる自治会総会において、年度計画が提出され、在校生の承認を得た後に計画に基づき運営されている。学生自治会の運営は、学生が主体的に活動できるよう教職員が支援し、執行部の学生からの報告を受けながら運営されている。

⑤ 図書室は利用しやすく学生に十分活用されているか

図書室は専任の職員を1名配置し、開室時間中は学生が自由に利用できるようになっている。

専門分野など整備し、図書の購入にも力を入れているが、学生はインターネットやデジタル教材を活用する学習スタイルが主流となり、書籍や雑誌を閲覧する機会は減っている。一方で、信頼性の高い資料に触れる場としての図書室の役割は依然重要であり、今後は学生のニーズに即した蔵書を購入し、利用を促していく必要がある。

IV 教職員の育成

教育技術の向上

① 教員が計画的に研修に参加できるよう支援しているか

令和7年度の研修参加については、学会発表、全国学会、研修、セミナー等に参加した。教員が計画的に研修へ参加できるよう、教員のFDの到達段階や本人の専門性、深めたい領域、担当業務等を踏まえて学会及び研修参加を計画的に支援している。

② 学校の抱えている課題を踏まえた職場内研修を行っているか

年に2回の教員研修を実施している。その中で、職場の課題を取り上げ、学習会やグループ討議を行い、職場内の現状の把握や職員間の達成目標の共有を図っている。看護管理研修を毎年、全職員を対象に役割に応じた管理的な視点の育成を目指した取り組みをおこなっている。令和7年度は、外部講師を招聘し講演を計画・実施した。新カリキュラムの柱となる臨床判断力の育成に関する講義内容を依頼した。当日は、全教員と臨床からの看護師が参加し学びを深めた。

③ 研修や学会等に参加した成果を他の教職員に還元する仕組みがあるか

学会・研修参加後、概要や学び・気づきを全教員で共有し、年2回実施している教員研修において共有の機会を設けている。全教員が出席できる時間確保が難しい現状がある。そのため、現時点で年間2日としているが、教員が主体的に参加できる「学びの共有の場」を確保していく仕組みづくりが必要である。

④ 授業を他の教員が参観、講評できる機会があるか

教員相互の授業参観及び授業公開の機会については、教員(2 年目)による公開授業を実施し教育委員会の指導主事の参加のもと全教員が参観した。公開授業は、講義、リフレクション、教育委員会指導主事による講義を依頼し授業改善に向けた学びの機会となった。

公開授業を特別な機会とするのではなく日常的な取り組みとすることを目標とし、教員同士が主体的に授業参観及び講評を行う体制づくりに取り組んだ(ポイントラリーカード作成)。令和 7 年度入学生より、電子テキストを導入している。デジタル教材を活用した授業展開などのスキルアップを目指した時間確保が不十分である。

看護教員の育成・確保

① 人材育成・人事交流推進に向けて広島市立病院機構と円滑な連携体制を確保しているか

看護教員の質の向上は、学校運営において非常に重要である。学校と臨床現場の連携による研究を共同で行っていく等お互いの専門領域を深めていく必要がある。今年度は、実習病院の指導者を対象に「学生の臨床判断力の育成」について学校教員が教育学会と中支部での発表を行い、指導者会議で臨床の指導者にも共有した。

病院機構との連携会議については、市立病院機構との会議と部門長会議への参加を行っている。人事交流の希望者の確認や人事交流の在り方や実習体制についての検討を行っている。また看護教員について理解をしてもらうため、令和7年度からポスターのみの広報を改め、電子カルテのスクリーンセーバーで誰もが目に付く広報とした。その他、看護教員の「楽しさ」「やりがい」といった DVD やパンフレットの作製も行った。意向調査の開始もあり人事交流者の確保もできた。

学生の実践的な学びを支援するために、臨床との連携を密にし、病院機構の医師や看護師に講義を依頼し、専門性を重視した教育を行っている。課題としては、臨床現場の高いレベルのままの講義では、学生にとっては理解し難いといった感想もあった。今後は看護部の全ての外部講師に対して学生からのフィードバックを行う予定である。

② 看護教員が働きやすい職場環境を整えているか

学校指定規則では、第 4 条第 10 項に「専任の事務職員を有すること」とある。本校では、全教員が専任教員要件を満たし、教務事務を1名配置している。

教材の購入や維持・管理、奨学金事務や講師依頼にかかわる事務など、教務課の事務に係る業務を教務事務担当が行い、教員が看護師教育に専念することができるよう、業務委譲を行っている。今年度は、年間で教員の時間を最も多く消費している奨学金事務(JASSO)の委譲を中心に行った。今年度からは、多子世帯支援の拡大となり、より多くの時間対応が必要となったが、教務事務が学生対応や JASSO 事務局との連絡調整を行うことで、教員の負担軽減につながった。

1 回/月の教職員全員参加が原則である「倫理カンファレンス」を行っている。内容については、倫理的課題の事例や学生における指導、教員間での教育に関する考え方等について各学年から課題を挙げ検討を行っている。

V 入学・就業・就職

入学者の確保

① より多くの応募者を確保することに努めているか

【第一看護学科】

広報担当者の活動により、進路ガイダンスの参加しやホームページ、ユーチューブの活用を行っている。職業として看護師を目指す者はあらゆる年代や経歴(学歴・職歴)に存在することをふまえ、募集活動をすすめていく。18 歳人口の減少、看護教育の大学化により、現在は、定数の確保は行え大きな変化はないが、今後出願者数は減少傾向になっていくことを踏まえ、高校との連携も必要である。社会人に対しても、入試形態として社会人入試の可否を今後検討する。

【第二看護学科】

近年、准看護養成所の閉校の影響により、第二看護学科の受験生の確保が減少傾向にある。広島広域都市圏の准看護師養成所を対象として、第二看護学科にも推薦入試枠を導入する。

② 入学者の状況について、入学者選抜方法の妥当性から分析し、検証しているか**【第一看護学科】**

推薦入試、一般入試ともに、過去の入学者の状況をふまえて、選抜方法を計画している。推薦入試の出願者数は、昨年度同様であった。一般入試については、入学生9割以上は高等学校卒業である。そのため、看護師になるという意欲や学習に対する姿勢等を面接試験で評価できるよう、形式や質問方法を工夫した。

【第二看護学科】

選抜方法の妥当性についてはアドミッションポリシーに照らし合わせて評価基準を明確にした。特に面接方法を工夫した。学生の資質を担保するためには、定員確保のみを目的とした基準緩和は行わず、入学試験の評価基準に基づき、教育の質の維持を優先した入学試験選考を実施した。専門知識の修得や国家試験合格のために必要となる国語力(文章力、読解力)の維持を図るため、試験内容や配点に関して検討が必要である。

国家試験合格率・就職率 100%**① 国家試験対策に個々の学生に合った指導・援助を行うなど、教職員が一丸となって取り組んでいるか**

国家試験対策委員会を中心に、入学時から 3 年間を通して段階的に取り組みを遂行した。各学年での目標設定と評価を前期・後期に設定し、課題を次年度に引き継ぐことにより、より系統的な学習に繋げるように努めた。学生評価では、国家試験での取り組みは効果的であると回答したのは、89.2%であった。

学習ツール(学習アプリ等)の活用により、模擬試験の復習等を進めることができた。しかし、国家試験対策の参考書や問題集等での学習スタイルを希望する学生も多く。学習アプリと参考書・問題集の活用を並行して行い、国家試験対策を実施していきたい。

昨今の看護師国家試験は、読解力が求められている。状況判断・適切な看護の選択等、臨床判断能力が高く求められている。実習での学びや経験が、国家試験合格に繋がることを再認識し、教育活動を継続していく。

②卒業生の広島市内就職率を高めるよう努めているか

広島市が設置主体であり、地域社会に貢献できる看護師の養成校として市内就職率は、70%台を維持している。学生に対し、本校の学生に修学を支援する制度を設けている。これは、卒業後に貸与を受けた年数を市内の医療機関に就職し、従事した場合には、返還が免除される制度である。成績やそのほかにも一定の基準を設け、学生の支援としている。

その他、市内就職につながるよう市内の医療機関を規模ごとに呼びガイダンスを行っている。ガイダンスでは、本校の卒業生も来校し卒業生から話を聞ける機会を設けている。

看護師国家試験に合格し、病院、医療機関への就職率は学修成果の 1 つと考え、就職希望者の就職率は100%であった。その他、新入生の入学ガイダンスや学校祭の説明会では、保護者に向けても教育理念の説明を行い、広島市の学校であり、市内就職への貢献についても説明を行っている。

課題としては、市内医療機関に置ける卒業後の定着率の向上を目指し、基礎教育と継続教育の継目のない教育を実施し、教育連携を行う。

③卒業生の到達状況、就職・進学状況を分析し、学校運営に活かしているか

卒業生の動向を学生支援システムによりデータ管理し、就職指導、進路説明会、ホームページ等に活用している。昨今、看護職を取り巻く雇用環境は、大きく変化している。病院側の採用戦略も共に働く人材としてふさわしい人材かといった学生個々の資質が厳しく問われる時代へと変化しているのが現状である。また、臨床現場が求めているのは、成績以前に厳しい臨床現場に耐えうる体力と精神的タフさ、倫理観、人間力といった看護職の基盤となる力を臨床現場で育成するのではなく、学生のうちから育てていく必要性がある。そういった意味でも、学生のころから「社会人基礎力」を意識し、育成していくことは、重要課題である。本校では、令和 7 年度から社会人基礎力の育成について見直し、委員会を立ち上げ本格的に育成に取り組み始めた。実習評価にも「社会人基礎力」評価点が新たに加わることとなった。学校教育には、教育目標があり、現在の教育活動がその目標に到達しているかどうかを評価しなければならない。どのような学生が巣立ったか社会でどのように活動しているかなどの追跡評価も必要である。令和 7 年度は、最も多くの就職先である、本校との連携先である市立病院機構から開始した。

VI 地域との連携・社会貢献

情報発信

①学校の情報について、ホームページをはじめ多様な手段で積極的に広報活動を行っているか

本校は、「看護師として必要な知識及び技術を修得させ、医療の普及及び向上に貢献し得る有能な人材を育成することを目的としている。少子化は、本校の学校運営や存続にも影響しており、そのことは、今後の医療現場での看護師不足にもつながるため、財政的な課題を抱えながらも、入学者の確保を積極的に行っている。今後の広報活動として、ホームページを充実させ、学生にとっての学校生活の魅力を伝えていくことが必要である。また、地域に貢献し得る人材確保には、入学者募集のための市内の高等学校や准看護学校を訪問し、進路指導部への広報活動も行っていくことを検討していく。

社会貢献

②社会との連携において、地域のニーズを把握し、看護教育活動を通じた地域社会への貢献を組織的にしているか

看護協会主催の講習会の講師派遣や中支部主催の中区ボランティアまつりに協会員として協力している。また、実習施設における臨床実習指導者の育成研修として、市立4病院に加え、他施設の実習指導者も参加し「臨床指導研修会」を行っている。